



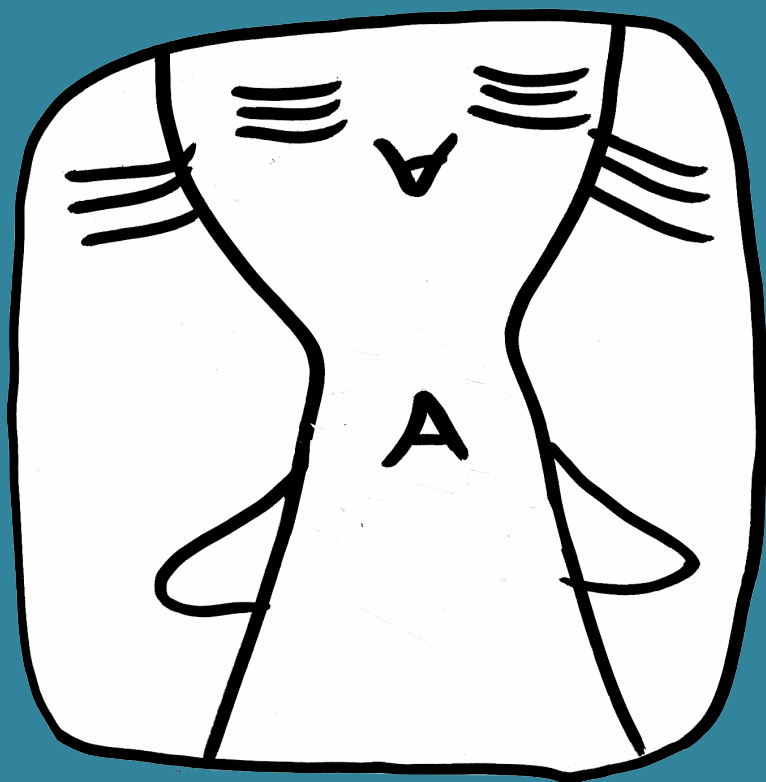
Title	特集1 : 「ともに考える」? : 第40回臨床哲学研究会 「当事者研究と哲学対話」
Author(s)	桂ノ口, 結衣
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68176
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

当事者研究と哲学対話



hahablog

- 山口弘多郎 「第 40 回臨床哲学研究会の概要」
- 小泉朝未 「臨床哲学研究会に参加して考えたこと」
- 永山亜樹 「研究会の感想」
- 中西チヨキ 「永山亜樹さんの言葉から」
- 永浜明子 「わたらしさと障がい受容」
- 佐々木大輔 「当事者研究も、暮らしも、「自分自身で、共に」」

特集1：「ともに考える」？

第40回臨床哲学研究会「当事者研究と哲学対話」

はじめに「臨床哲学」と言ったところから標榜されてきたことは多分いくつかあって、たとえば「ともに考える」「動きながら考える」、とか。

この特集では、正直に言って近年の臨床哲学研究室は「ともに考える」が、ずいぶんへたくそになってしまっているのではないかと、を問うひとつの角度として、第40回臨床哲学研究会をとりあげます。

第40回臨床哲学研究会は、「当事者研究と哲学対話」をテーマとするシンポジウム形式をとり、2017年3月21日に開催されました。この後、同研究会は第41・42回と、同年夏に2度開催されてきました。どうして、第40回、なのか。

ひとつ。この第40回の研究会の後には、この研究会について、臨床哲学研究室にいるひとたちで、ふりかえってすこし、話をしたからです。

この研究会の後、にだけ、この研究会について、臨床哲学研究室にいるひとたちが、ふりかえってすこし、話をした。

近年の臨床哲学研究室は、何よりもまず「ここ」が、「ともに考える」ことの難しい場になっていると、一人の院生である私は感じます。もはや当然になっているとも言える「ともに考える」への諦め感を動かす何かがこの日あったのだとすれば、それは何であったのかを、そして何より、「ここ」にともにいるはずの皆はいったい何を聞き何を考えたのかを、もっと知りたくて稿をあつめました。

またひとつ。この第40回は、前後の個人研究発表会的な回よりも増して、「ともに考える」ことが目指されたシンポジウム形式の場でありました。どのご発表も真に示唆に富むすばらしいものでしたが、では「ともに考える」場であったと言えるのかどうか。そうした検討を、今後真摯にしていくための参照項を、多少なりとも残しておきたいと私は考えました。

山口弘多郎さんは、発表を正確に要約するちからを臨床哲学研究室のなかで群を抜きお持ちの、フッサリアンです。第40回研究会の全体をまとめていただきました。（稲原さんのご発表の中に出てくる現象学的用語を、非常に簡潔

に分かりやすくまとめてくださっているところが、個人的には読みどころ。)

身体やその表現について研究されている小泉朝未さんは、会が終わってからなんとなくもやもやしているところを感想として言葉にしてくださいました。

「声を出せる状況に自らを置くために、哲学対話もしくは臨床哲学研究室というのは有効だろうか」という問い、また「前提を宙づりにするのにも時間がかかる」という指摘には、二重三重にも立ち止まる必要があるように思います。

永山亜樹さんには、ご発表を聞き個人的に気になった点に関して快いお返事をいただき、掲載させていただきました。ここには、たとえば「「本気で向き合ってくれている」と感じる時は、かけ離れた未来ではなく、かと言って現状に浸る訳でもなく、一步先のことを丁寧に話ができる」のように、まぎれも無い永山さんご自身の経験でありながら、しかし上述の小泉さんの提出された問いを考えていく上での、大きなヒントとなることばも多くあるように感じます。

看護師でもある中西チヨキさんにも、研究会の感想を伺いました。皆さんは、おそらく読み終えるやいなや「純な感じ」とはいったい何だろう、と問いはじめることになるでしょう。ぜひ実際に、ともに問いはじめる場が生まれることを望みます。

永山さんの「先生」でもある永浜明子さんの稿にある「うけとめは、跳ね返しを可能にする」という一文は、私の心にずっと響いています。この「うけとめる」は、確かに跳ね返す可能性に、しかし少し眺める可能性にも、そっとしまいこむ可能性にも、なんて豊かにひらかれているのだろう。「うけとめる」が、決して一人の強さではなく、人との関わりの中からはなかに生まれているというそのことを、私は何度でも読み、信じていきたいです。

学部生の佐々木大輔さんには、以前より当事者研究に関心をお持ちだったことから、稿を依頼しました。あらためて、「本物」の暮らしと本質的に結びついた苦労を「ともに考える」試みを続ける諸先達の思想と実践から、臨床哲学が学ぶところは大きいでしょう。

最後に、ご登壇いただいた松前香里さん・稲原美苗さんには、研究会後も非常に示唆に富むやり取りを続けていただきましたのに、私の力量不足により、それを今回皆様にお届けするかたちにはできませんでした。こうした心残りな点はございますが、どうぞご容赦いただき、読者のみなさまのどこかに「ともに考える」きっかけが生まれることを願っています。